

月刊

いじろのとも

第六卷

二月号

常に反省精進

無意識の

自己と仏が

一体と

ならないうちは

人間の

真の平等

分からない

人の尊さ

たてまえで

分かつてみても

現実

知らないうちに

差別する

常に反省

していても

間違えばかり

犯してしまう

だからこそ

精進しよう

どこまでも

ただひたすらに

精進しよう

生を考え直して

みたい人は(十四)

『老子』解説(十三)

今月号は、第五十二章を取り上げます。

(第五十二章)この世(天下)には、始めがありません。それを、天下の母と呼びます。その母を体得し終わつたならば、翻つてその子を知ることができません。その子を知り尽くしたならば、その、母を体得したことを守らなければなりません。そうしますと身を没するまで、あや(殆)ういということがないのです。

(その母の体得のためには)「からだ」に属する感覚の穴を塞ぎ、運動の門を閉ざします。また、「あたまたま」の働きを挫(くじ)き、「こころ」のもつれを解きほぐします。そうしてきますと、光に和すことができるようになり、その塵に同じくなれるのです。こうした状態を道との一体感(玄同)と呼びます。そして、この和することを「常」と

言い、「常」を知るところを「明」と言うのです。

この光によって「明」に復帰すれば、身に禍いを残すことはありません。これを「常」に入ると言います。

この訳をお読みになって、お分かりになりましたでしょうか。この章も実に深遠な真理を述べています。

ですから、日本人やヨーロッパ人のような老子にとつての外国人は言うに及ばず、中国人ですらも、間違わずに解釈することができていません。これでは、何だか老子が気の毒に思えてきます。

実は、この章の編成は武内義雄氏の『老子之研究』によつています。細かいことは省略しますが、第五十五章と第五十六章の一部がこの章に取り込まれていますし、この章の一部分も省略されています。

どうも、中国(支那)の人の特性として、原典を重視しない傾向があるようです。それは、漢訳仏典にも見られますが、そこだけではなくこの老子にも見られます。後の人たちが、自分で理解したように、原典を改変して行くのではないかと思われるのです。

でも、ここで翻訳したような編成は、おそらく老子の原典に近いのではないかと思われれます。順次、解説して

行きます。

書き出しの「この世には、始めがあります。それを、天下の母と呼びます。」という部分ですが、第一章を取り上げた昨年の二月号に「無は天地の始めに付ける名、有は万物の母につける名」という具合に出てきましたし、また第二十五章を取り上げた昨年の九月号では「物があり、混成していて、天地に先立つて存在しています。それは、・・・天下の母とすべきものです」という具合に出てきました。もう一度それらを見て、確認して頂きたいと思います。

次の「その母を体得し終わつたならば、翻つてその子を知ることができます。その子を知り尽くしたならば、その、母を体得したことを守らなければなりません。」という部分ですが、とても難しいところですが、

「その母を体得」するということですが、それは、既に、昨年七月号の第十六章で、かなり詳しく述べています。もう一度お読み頂きたいと思えます。ここで、少しだけ復習をしておきますと、「母」とは老子の「道」のことですから母を体得するとは、道を体得するということとなります。それは仏教でいえば、悟りであり、解脱であると言えます。私の理論では、無意識の「生命蔵」と「如来蔵」の統合をはかることです。「あたま」で何

かを知って体得できるものではありません。それに、「たましい」と「からだ」と「ところ」の働きを伴わせて、「無」に至り、初めて実現できるのです。ですから、自分で、はかつてできることではないのです。意識の働きすべてを集中して無意識に至ると、ひたすら精進するとき、向こうから勝手に来てくださるのです。私たちにできることは、ひたすら精進を重ねることだけなのです。ですから、「成仏」するまで、そうした精進を重ねることが人間の生き方の全てであると言ってもよいのです。

母を体得し終わつたならば、「翻つてその子を知ることができません。」という部分ですが、無意識の統合ができますと、逆に意識で知るこの世の現象（母の子）は全て真実のままに知ることができるようになります。例えば、自然の中の一本の木を見ても、その生命力のままに感動して見ることができるようになります。例いくらに儲かるとか、どれほどの木材がとれるとかといった人間にとつての利用価値で見るとはならないのです。また、それは木だけではありません。無生物である、一つの石を見ても、同様なのです。真実のままに知ることができのです。勿論、目的をもって見ることも含まれていることは、ことわるまでもありません。

次の「その子を知り尽くしたならば、その、母を体得

したことを守らなければなりません。そうしますと身を没するまで、あやういということがありません。」という部分に進みます。人間は哀しいかな、あたまで知っても、こころにはすぐ垢がたまってきます。自分では気付かないうちに垢がたまって、「自己」への執らわれが生じてしまうのです。不断に修行を重ねて、「母の体得」を維持していかなければなりません。実は、母を真に体得しますと、自然にそれができていくのですが。

そうしてきますと、「身を没するまで、あやういということがない」のです。これは勿論、身体的なことを言っているではありません。例えば、戦争や天災のような災害に巻き込まれれば、肉体はあやうくなることでしょう。そうではなくて、ここでは心理的なことを言っているのです。心理的に不安に陥ったり、自分の人生を不満に感じたり、不幸に思ったり、生きていく力が無くなったり、悪を犯したりしなくなっていくことを言っているのです。道は永遠ですから、道を体得しますと、永遠の命を頂くことになるのです。そうしますと、一瞬一瞬が、永遠なのです。常に、いま、永遠を生きていると感じるのです。くよくよ、過去を思い煩い、未来に不安を抱いて、悪をなすことがなくなってくるのです。

後半の「母（道）を体得」するための方法の話に移り

ます。そのためには、「からだに属する感覚の穴を塞ぎ、運動の門を閉ざします。また、あたまの働きを挫き、こころのもつれを解きほぐします。」

これは、正しく瞑想（観想）です。坐禅です。ヨーガです。感覚の働きを抑え、運動を静め、あたまを空っぽにし、こころを無にして、坐禅・瞑想するのです。ヨーガでは、呼吸を伴わせてゆっくりと運動も行ないませんが、それは、できるだけ容易に、感覚の働きを制限し、こころのもつれを解きほぐす手段として行うわけで、「運動の門を閉ざす」ことに反するわけではありません。こうした、からだ（身〓感覚・運動）と、あたま（口〓認知・言語）と、こころ（意〓情動・感情）の統合によって悟りを体得（空海では即身成仏）することは、真言密教の修法では「身口意三蜜の加持」として厳密に「儀軌」に定められています。とてもしばらしい方法です。

「そうしてきますと、光に和すことができるようになります。塵に同じくなくなるのです。こうした状態を道との一体感（玄同）と呼びます。」という部分ですが、ここからは、無意識のうちに起こる統合の自内証を述べていますので、理解することは、自分が体験しない限り、不可能です。学者にはこうした体験がないとみえて、これまでの解説で、間違わないでできているものは一つもあり

ません。「光に和し塵に同ず」は一般に「和光同塵」と熟語になっていますが、その意味は自分の才知を隠し和らげ、世間の凡庸な塵に同調する、というように解釈されています。しかし、これは、間違っていると思います。そんな俗っぽい処世のことを言っているのではなく、前述のように、解脱に至った時の自内証を言っているのだと思うのです。語順を入れ換えて言えば「光塵に同和する」ということだと思うのです。密教では、身口意の三蜜が加持されますと、自分のこころの中に光のイメージを得ることができ、それと一体であると実感することができます。私のした一つの体験で言いますと、全身が大日如来（太陽の仏身化）の光に包まれて、毛穴の一つ一つからその光が身体の中にしみ込んでくるのです。この和光同塵は、そうした体験を言っているのだと思うのです。そうなった時、無意識の生命蔵と如来蔵が統合されて、宇宙根源の原理と一体であると実感できるのです。それを老子は「玄同」と言い表しているのです。「この和することを常と常を明と明は、常と明は、既に昨年の七月号と十月号で述べました。ご確認下さい。常とは、人間本来の在り方、つまり人間は生まれながらに無意識の中に自分が生き延びようとする「生命蔵」と

他者を求めようとする「如来蔵」とを宿しており、それを統合する（和する）とき、悟りに達することができるのですが、そうやって永遠不滅、恒常不変の命を頂くことを言うのです。そうした命を頂けることを知り、かつ、そうなることを明と言うのです。

最後の「この光によって明に復帰すれば、身に禍いを残すことがありません。これを常に入るといいいます。」という部分ですが、これらのことも無意識での自内証を言っていますので、とても難しいことだと言えます。

これまで述べて来ましたが、無明の闇を打ち破る光を無意識に復帰することで得ることができますが、その光と一体であると実感すれば、「身」に禍いを残すことがないのです。この身も前述と同様に、身体のことを言っているではありません。自分の心のことを言っているのです。

こうなることを常に入ると言う、ということですが、常とは永遠不滅の命を頂くことです。常に入るとは、そういう状態になることを言っているのです。それは、仏教で言えば、悟りであり、解脱であると言えます。

このように、老子も結局は仏教と同じように、精進をして道を体得すること、つまり悟り・解脱に達することを説いているのです。

自作詩短歌等選

人という字

人という字は
二人の人の
支え合いを
表している
それは
人の心を感じるころ
ということ

愛を与えず奪う

現代人は
自己中心的に
人から
愛をもらうことしか
考えない

連れ合いから

わが子から

わが親から

わが兄弟から

仲間から

社会から

そこでは

エゴイステイックに

自己を主張し

他者から承認されること

が

一番大切になる

愛を

あげるのではなくて

善く説かれたことば

(法句經五一)
うるわしく
あでやかに咲く
花にして
香り無きもの
あるように
善くも説かれし
ことばでも
実行しない
人にとり
実り一つとて
あること無し

善いことを多くなせ

(法句經五三)
うず高く
花を集めて
花飾り
作るが如く
人として
生まれて死ぬべき
身ならば
善きこと多く
なして死すべし

感謝報恩

にちにちの
暮らしの中に
一つでも
感謝みつけて
恩に報いよ

自作随筆選

ある大乘仏教者

一月二十九日(日)のNHK「こころの時代」は、長野市篠ノ井にある円福寺東堂(曹洞宗)の僧侶・藤本幸邦氏(八十四歳)への、「七粒の米に託して」と題した、金光寿郎氏のインタビューでした。

藤本氏は、戦後東京上野の戦災孤児を見てかわいそうに思い、引き取って寺で育てはじめたのが、児童施設を始めるもとになったとのこと。

その仕事を支えた言葉は、道元禅師の修証義の次の歌だということです。

われは仏にならずとも

衆生を渡す

僧の身なさん

現在は、勿論、戦災孤児ではなく、家庭崩壊、離婚家庭の子や登校拒否の子を預かっているとのこと、彼らはみんな、愛情欠乏症に陥っているとのことでした。だから、育てるというのではなくて一緒に暮らす、という気持ちで接しているとのこと。また、子育てには

規律と自由があるとのことでした(私は、愛情と自由と統制をあげていますが)。規律の例として三つあげられました。

はきものをそろえよう。

あかるくごあいさつをしよう。

おそうじをしよう(歯、体、室、心をきれいに)。現在、サバ運動と名付けた運動(一食一円のお布施をする運動)を推進していて、一人一人の人が会員になって下さっており、平均一年に一人三千円ぐらいで、年間三千万円ぐらい集まっている。なお、サバとは、食事の時に米粒を七粒(約一円)残しておいて、鳥などの動物にお布施(施餓鬼)をすることを言うそうです。

それを、東南アジアの子どもたちにお布施しているとのこと。具体的には、小学校、中学校、高等学校へ行くために現金を支給している。また、学校を建てる援助をしている。さらに、長野県の大学に東南アジアから留学している人に、年間で一万円の本を差し上げている。去年は二五八人に差し上げた。それがご縁で、国へ帰っても日本とアジアをつなぐ架け橋になってくれている。

こうしたことをして、スラム街出身で苦学して勉強し、いまバンコクのスラム街の救済のために働いているというプラティープ先生(女性)に出会った。その人

が、「なぜ、あなたはそんなに優しいのか」と聞くので、「優しいのではなくて、自分が嬉しいのだ」と答えた。では、「それを支える思想は」と聞かれたので、「この世から敵をなくすることにある」と答えた。みんなが仲良くする社会は、人が愛し合うことによつてのみ実現できる。戦争では決して来ないと思う。

一 錢一草の財をも布施すべし

此世他世の善根を兆す

この人は、前にあげていた道元禪師のお歌を、必ずしも正確に理解しているとは思えませんし、解脱しているとも思えませんでしたが、道元禪師のお導きを信じ、ひたすら他者のために尽くす大乘仏教者としての実践は尊いと思いました。

この人を貫くものは、他者への愛（お布施）ですが、子どもたちを教育（響育）するときの話で出てきました、自由と規律も大切な思想だと思いました。それは、この人の実践の中から体得したものだと思うのですが、私の理論で言いますと、自由は「自己」に、規律は「他己」に属するもの（概念）で、人間はそのバランスが大切なのです。そのバランスを作りだすものは、人の、いや仏の、神の愛なのです。人類が、この地球が、滅亡から救われる道は、この人の実践する愛をおいてはありませぬ。

釈尊のつとば（三三三）

法句經解説

（一一二一）「その報いは私には来ないだろう」と思つて、悪を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされるのである。愚かな者は、水を少しずつでも集めるように悪を積むならば、やがてわざわざいに満たされる。

（一一二二）「その報いは私には来ないであろう」と思つて、善を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされる。気をつけている人は、水を少しずつでも集めるように善を積むならば、やがて福德に満たされる。

この二つの偈は、対をなしています。前月号で取り上げた（一一九）と（一二〇）同様に、二つで、因果応報を教えるものです。前者の（一一二一）が悪因悪果、後者の（一一二二）が善因善果を教えています。

因果応報については、先月号でも述べましたので、ここでは、前回とはすこし違った側面から話題にしてみましたと思います。それは、障害児にお前のような人間が生まれるのは先祖の悪業（あくごう）の結果であるとした

り、いま差別されている人に、それは、先祖が悪業をなした報いだから仕方がないとしたりする考え方です。仏教の因果応報の考え方では、こういう具合には言っていないと思います。

例えば、障害児が生まれることで言いますと、それは人類全体が背負った宿命なのです。特定の誰かのせいではありません。ただ、性的享楽（悪）を追求して、そのために子どもが先天的に病気をもって生まれるような場合は、まさしくこの偈でいう因果応報になっていると思います。しかし、それは子を産んだ親本人について言えることで、子どもには関係ありません。子どもは親の業を背負って生まれてはきませんが、それはあらゆる人がそうであって、多少その業の重さに差はあるでしょうが、誰一人として業を背負っていない人はいないからです。

ですから、大切なことは、障害者差別にしろ他の差別にしろ、自分に責任のない、差別を生み出している業から抜けられるように、周囲の人（親だけではなく人類全体）が配慮してその子を育てていくことなのです。そして、本人もその業から抜けられるように努力・精進を重ねていくことなのです。勿論、もし自分がこの世でなした悪業から余分な業を子に背負わせたのなら、親はその子を見て、自分の業の深さに気付き、自分もその業から抜

けられるように努力・精進を重ねて行かなければなりません。あるいは、重い業で苦しむ子があるならば、それが自分の背負った業の深さの故かも知れないことに思いを致し、自分もその業から抜けられるように努力・精進を重ねて行かなければなりません。

ついでに申しますが、それを私は「響育」と呼んでいるのです。親が一方的に子を育てるのではないのです。自分の子を見て、あるいは子を育てて、親も成長して行かなければならないのです。それが、家庭の一番大切なあり方なのです。そうなるとき、家庭は、その構成員相互の人格完成の場になっている、と言えるのです。

これまででは、いま苦しんでいる人に、それが前世の悪業であると言うことの間違いを述べました。そう言うのではなく、取り巻きの人たち（人類全体）が、あらゆる人をその業から救う努力・精進をすることが大切なのです。勿論、本人もその業から救われる努力・精進をしなければならぬことは言うまでもありません。そうして皆が努力するとき、この世はより住みやすい、誰でもが幸せだと感じられる世の中になっていくのです。それが、即ち、ここでいう因果応報の考え方につながっているのです。

この考え方は、いま不幸にも何かで苦しんでいる人に

だけ当てはまるわけではありません。いま日常性に流されて、満足に思っている人にも、当てはまるのです。なぜなら、そうした人にこそ、不幸はそこに待ち受けているからです。人類のあらゆる人が背負っている業が口を開けて、その人を不幸に飲み込もうと、待ち受けているのです。逆に言えば、いま不幸だと感じている人こそ、仏・神さまが、救いの手をそこに差し延べて待っていて下さるのです。つまり、その業を自覚し、その業から抜けられるように、努力・精進する機会を与えて下さっているのです。

もし、不幸だと思える人は、この偈に言っていますように、毎日少しずつでも善いことを積み重ねて頂きたいと思えます。そして、それと同時にこころを磨く精進も重ねて頂きたいのです。永遠の命を頂くチャンスがそこに待ち受けています。

もし、自分の背負った業に気付かず、いま幸せだと傲慢にも思つて、精進や善を積むことを怠っている人は、既にそのことが悪をなしているのだと気付いて頂きたいと思えます。そして、毎日善いことをなすように心掛け、業から抜けられるように心を磨く精進をして頂きたいと思えます。もし、そうした努力・精進を怠りますと、その悪はやがて業の瓶を満たし、ついには一杯にして自分

に振りかかってきます。そして、死ぬときはその業の瓶の水を浴びながら、あがき、もがき、苦しまなければならないのです。

(一二五) 同行する仲間が少ないのに、多くの財を運ばねばならぬ商人が、危険な道进行するように、また生きたいとねがう人が毒を避けるように、人はもるもるの悪を避けよ。

「あなたにとって一番大切なものは何ですか」と伺つたら、皆さんは何と答えられるでしょうか。多くの方は、「命」と答えられるのではないのでしょうか。では「二番目は何ですか」とおたずねすれば、おそらく「お金(財産)」とか「名誉」と答えられると思うのです。善をなすこととか、悪をなさないことと答える方は、滅多にいないと思うのです。

この偈は、そうした自分にとって大切な、命や財産を守るのと同様に、悪を避けることを心掛けよと教えているのです。

人間が善をなすとか、悪をなさないとかは、命や財産のように自分だけのことで決まるものではありません。それは、他者との関係で決まることなのです。

私のモデルで言えば、命や財産は「自己」に属すること、善や悪は「他己」に属することなのです。自己を抑えて他己を働かすとき、善をなすことができ、自己に閉じたり、自己の働きばかりをよくして、他己の働きを悪くするとき、悪をなしてしまうのです。

ですから、人が「自己」に閉じ、「他己」の働きを悪くするほど、この世は住みにくくなっていきます。お互いの繋がりは、他己の中心である「こころ」を失い、物化して、利害関係やギブ・アンド・テイクの取引関係だけとなり、どんどん薄くなって行くのです。そうなりますと、人は外界に定位することができなくなり、精神的な健康を失って行き、他人を平気で無視することができます。自分の命は大切でも、他人の命はどうでもよくなって行きます。自分の命の尊さと他人の命の尊さに差が出てくるのです。自己に閉じるほど、他人の命は軽くなって行きます。それは、何も命だけの問題ではありません。他人の財産も他人の名誉も同様になって行くのです。

こうなることが、悪をなすことになっているのです。人間は、人生の時期では、青年期や青年期過ぎの若いときが、自己を実現したいために自己に閉じやすくなります。その分、不安定になり、悪を犯しやすくなっています。

ます。また、現代人は、釈尊の時代よりもずっと自己に閉じて他己を失い、いわゆる末法の時代を出現させています。

自己の、命、名誉、権力、面子、世間体、家族、民族、国、言語、など世俗や処世への執らわれを捨てて、他己を回復するように努力・精進しようではありませんか。それは、釈尊や老子やソクラテスやキリストのような聖者を信じ、聖者の言われたことをよく聞いて、こころを磨いていくことなのです。

読者とのコミュニケーション

俳句

枝に飛びリス顔出して山笑う

暮るるまで居たき道なり梅咲けり

掌のひらにひしめく命の種を蒔く

(徳島県・須藤一樹)

後記

一、一月十九日（木）大学から帰って、喉が痛くなり、悪寒がして発熱し、不覚にも、風を引いたと分かりました。翌日、医者で注射をし、薬をもらって飲みました。

二、でも、翌日から四十度近い熱が二日続きました。インフルエンザだったようです。その時は、頓服も効きませんでした。三日目にやっと熱が三十七度台に下がったとき耳が痛くて、耳鳴りがし、抗生物質をもらって飲みました。

三、でも、ずっと耳が良くならず、耳鳴りと難聴が続きました。先日、遂に内科から耳鼻咽喉科に替わりました。難聴の程度と、耳に水が溜まっている程度とを計りました。とても便利な器械があることに驚きました。

四、早速、鼻の局所麻酔をし、鼻から耳への管を風で通しました。続いて両耳について、片方ずつ耳の麻酔をし、耳から水を抜いてもらいました。

五、こんなになつたのは、生まれて初めてでした。

六、最近すこし太り気味ということ、体重を二カ月で5kgほど減らしていましたので、体力がおちていたせいだったのではないかと思えます。ヨーガは毎日四十〜五十分はやっていたのですが。

七、風邪で、体調が悪い間、寝ころんで岩波文庫本の

『善の研究』（西田幾多郎著）を読みました。

八、坐禅の体験を哲学の出発点にしているのだと思うのですが、肝心なところが回りくどく、言辞を弄しているわりには、分かりにくいと感じました。坐禅の哲学化としては不十分だと思います。いずれ、西田哲学についても論文に書かなければならないと思っています。

九、最近、道徳教育や倫理学に関心をもち、古本もかなりたくさん買いました。その中に、大谷愛人著『倫理学講義』（勁草書房刊）があります。この方は、慶応大学名誉教授で、七十一歳の方です。本はとても面白く、この本をベースに倫理学について何か書けそうです。

月刊 こころのとも 第六卷 二月号 （通巻 六十二号）	平成七年二月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（じょうせい）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

